



地域の声を活かした “みんなに優しい避難所づくり”



三重県 四日市市自治会連合会
事務局長 大瀧 あずさ

1 はじめに

四日市市内には、727の自治会があり、28の地区連合自治会を1つにした組織が、四日市市自治会連合会（四自連）です。

全世帯127,517世帯のうち、108,584世帯が自治会に加入し、85.2%の高い加入率で推移しています。

四日市市は、沿岸部にコンビナート企業が立ち並ぶ産業都市で、南海トラフ巨大地震が発生した場合津波等の災害への住民の危機意識が非常に高い地域です。

平成23年に発生した東日本大震災の時には、伊勢湾台風の時の恩返しという人も多く、発災直後から約3か月かけて自治会の組回覧等で義援金を呼び掛け、総額51,850,542円を被災者に届けました。その後も、甚大な自然災害が起こる度、募金活動を行っています。

市内には、24の地区市民センターがあり、災害時に防災対策本部となり市本部と情報共有でき、四自連、地区防災組織連絡協議会、市との三者が連携し、日々防災活動を行っています。

2 きっかけは、女性の視点

平成25年に、「男女共同参画の視点を取り入れた防災まちづくり」をテーマに災害時の避難所生活で、運営する側に女性が参画していることの重要性や子ども、弱者に対する女性の細やかな視点が必要であることを考えるセミナーを開き、5年間かけて全市に啓発していきました。

平成28年2月には、男女共同参画の視点を取り入れた避難所運営マニュアルを、地区防災組織連絡協議会、市と共催で作成、地域に

配布し意識改革していきました。

作成したマニュアルを基に、地域で活躍する女性が参加する「女性リーダーのつどい」を開催し、四自連の事業計画にも組み込まれています。



男女共同参画の視点を取り入れた避難所運営マニュアル

3 実際に訓練をして出てきた課題

平成29年7月には、四自連主催で、市、自主防災組織連絡協議会の協力のもと、避難所設営に女性の視点を活かす訓練「大切なひとを助ける避難所づくり」を実施しました。

指定避難所となる体育館を会場にして、避難所レイアウトや簡易トイレ、段ボールベッドの組み立てを女性だけで行い、訓練を実践しました。



避難所設営 段ボールベッド

実際に訓練すると、「授乳室、更衣室、トイレ、ペットの居場所」といったスペースは、前もってつくっておかないと、避難者が入ってから移動してもらうことは難しいのではないかと、感染病患者や、体の不自由な方はどこで生活するのか、等いろいろな課題があがりました。

そこで、平成 30 年に、四自連が企画、立案し、指定避難所の体育館や空き教室の避難所の配置に必要な、「避難所案内表示板」の作成に取り掛かり、より多くの意見を聞き進めました。モデル地区を設けて、地域の関係者と共に、指定避難所の学校長へ案内表示板の必要性を説明し、体育館、空き教室のレイアウトを検討する会議を開催しました。



避難所案内表示板一例

参加者は、小学校に通学している生徒の保護者や地域に住む女性、自治会長や学校長で、避難所レイアウトを話し合い、校舎を歩き、案内表示板を配置し、意見を聞いていきました。



避難所レイアウト訓練

1 年後、試行錯誤して出来上がった案内表示板は、A 3 サイズ 40 種 74 枚で 1 組。市内にある 24 地区市民センターと 118 か所ある指定避難所の防災倉庫全箇所に配備することができました。

4 案内プレートは一目でわかるように……

- ・中央にピクトグラム。
- ・市内で使用人口の多い英語、ポルトガル語、スペイン語、中国語、韓国語、ベトナム語の 6 か国に対応。
- ・外国人や子どもにもわかる「やさしい日本語」を入れる。
- ・災害時、混乱した避難所で左上の番号で誰でも案内ができる。
- ・立ち入り禁止、使用禁止の表示板は、数多く貼ることができるように、複数枚用意。
- ・避難生活が困難な高齢者、障がい者、妊婦、食物アレルギー、ヘルプマーク使用者等は、受付で対応できるよう表示。
- ・感染症患者（コロナウイルス・ノロウイルス等）は別に案内。
- ・ペットは、犬専用、猫専用、その他の動物と 3 種類に分ける。

表面は、ラミネート加工し、両端に穴をあけ、ひもで掲げたり、裏面はマグネットをつけ、白いスペースは、ホワイトボードの役割を果たして文字を書くことができます。

各地区で、まだ避難所の配置図のできていない地区が多く、参考にしてもらうように呼びかけました。コロナ禍において、避難所での専用スペースは、今まで以上に重要であり、今後も順次、案内表示の追加をしていくよう働きかけます。

平成 25 年から「男女共同参画の視点を取り入れた避難所運営」をテーマに継続して取り組み、男性の多い自治会長の意識改革から始まり、女性（弱者）の視点を取り入れた“地域の声からの提案”を、今後も大切にして活動していきたいと思ひます。